

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	気概念
Author(s)	プリオ ウタマ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1991 : 39 - 43
Issue Date	1992-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039300
Right	
Relation	



「張こ。氣らほははあ文、つる
 」けきう、れてどとにう、い、あ
 す付氣るよ合こつ」いり重)、
 とを「すき場、使心草とあに社牟
 落氣」くでうたを「道」どう拓触
 を「す恵が思ま」はも「た」よ創い
 氣」らせと。心敷しのいのの=な
 「う晴氣こうる」多右ても手』え
 使を「るよあに大ら漱しる能論見
 寸を氣」げしでりもな回奮いい化に
 移氣「るあ理のわど不夏興てな文目
 を「」せを表をかれ、せはれえのる。
 氣」くた葉を能のけははい氣さ見氣いる。
 「る核持言を可」るとがのぞに『てあ』部えよる意此着態心比らう、づの六をこ
 」配ををた動不氣を」ち彼閉目雄でで心内超う配のこ付事」をだげに心眼四生、
 うを氣氣ったは「で氣のにての行らけ」のをい自分、がるをしるっ係「もば発く、
 失氣「」入妙とはも「そ対、種塚かわと身身と氣自り、いし廻れも関。しわのな
 を「」の微妙こ部と。は反か一赤回う」自自る「をま氣て廻いらは無るずい志は
 氣」る寸氣のす一こる氏と向、(周い氣自分あ)」つ「しい言とてはは必、意で
 「く取回が心まくるあ雄れにて。のと「自自でく氣。なり言のじいとてはははな
 」性をつて清ごすで行そ内つるフ」のぼろの向「る動的なと感対象対象と物的
 むを氣氣幾いにの現の塚。「かい心のこ」しもがにあ觀此らながに對わ對こ内こる氣つとる奪こ注こて
 病氣「」だおずを表も赤たは向てくも心むる氣りで主さ此」異しる現の」はるあ「、」くをうれ、っ
 を「」まにい、をい。い」にしはな氏「はず」不能に分こる差廻あい想るといで、てくて意かぞば伴
 氣」るくし語用と味ないで心外析フう敏。「制」、可象配、配ないに言着か」てとしてしつっ注向此らに
 びる此引の本をる意此なん「」分氣よ村た氣規るはは對、しを的言前がのかくきこしとが上がそな此
 氣えらをし日葉見たらい沈、はとくの本此「、不ら解なりか心質のの態そに向起る對則氣に態味にるそ
 「替取氣もに言を似えてはぎとの「長、く、し不此理的たし「本方目状、心水にすに原「識状興物守、
 」をを「にるう例くかっ心引」も、波たてて配にこの觀此。」水ので識て「心周用こける本あ物の法此
 な「」の要とのぼ置重る章「いまい 明對を「る。一のけ水向あたのる際し「にに
 説に分く、あ、かづらがでしそすに在。現う
 にも自分もら向え心妙と在統」なあはよ
 うあろ本してん方考「微妙現持くはどとい
 ののむ「い解、りのるこを態部い必こるも
 ども、。言とはたもけそ」状内思るい配て
 たりたののでつるか、心なの「いなをき
 をい水連もしわいにと、「物的己はてれ心起
 いて拡さ一き廻係て心るり觀自いし離「不
 がれに明のとい、し「みま主間る現を、何
 ちま回説ご言り現」てつ「の期あ出心し
 の含周に在ののた表くし。己定」に中味か
 識らしを比較う自一く前時意此
 言るま氣」をで現も
 しにそ、り「こはす
 と前、りあ、る態失
 体のはあどりけ状消
 主眼のどとあ向のり
 をにうとこでをらは
 」「いこうと意此や
 」「いこる奪こ注こて
 」「くをうれ、っ
 」「てくて意かぞば伴
 」「てとしてしつっ注向此らに
 」「しとが上がそな此
 」「態味にるそ
 」「識状興物守、
 」「心水にすに原「識状興物守、
 」「本方目状、心水にすに原「識状興物守、
 」「水ので識て「心周用こける本あ物の法此
 」「一のけ水向あたのる際し「にに
 」「にに

くに間対する、配のえ自
 とこのに動配のえ自
 こと象の気はいそ
 の、象の無の「れ言気
 の、対無の「れ言気
 もなとはら。そこに
 には謝とれる。そこに
 的で意図こあもとす
 観の、意。にで、
 主る間の側合の、
 にいの観の場性前
 料てと主さ体る動もあ
 純し観、分自い能り
 はわ容て配水てのよの
 実表とつ、それ己る
 は、を観おれ気さ自配
 は向主でら、れもをて
 し動はのけて、表か気
 迎の突なづくいたがさ
 い、「の向を言あ己置
 言心はも方はで、自配
 の「とな、に格を。れ
 らな」的し側物まいさ
 此う気気与の目動な分
 こよ「困関己がなざ配
 、るる、自気的すに
 にれい種し、発に象
 るらて一着はく自の対
 すえれに付体とのもの
 要考ゆあに主ご体るそ
 に言に象のの自いが

に「單らてさの氣材性、めてか
 」る「見」つ明語の本理る全の
 氣れ、とい説明語は「くがも
 「わどすとに欧本義来一相た
 の思な指情う来日定元「マ出
 こに」を感よ元にあけを種え
 はうむさ「うはるこの念の超
 だよ進働はい葉こ、う概意を
 中すのの全と言とし、諸情相
 の示氣識場」のうかとな知諸
 堂を「意うる等しいし氣的の諸
 文き」たい寸心と。は学し体的
 弘働うまと味良氣の由理、具
 』の失志「意・てれ理心、の
 造面を意るを志しら。壇の意
 構情氣やめと意におる教も情
 の感「力答こ・めてあのい知
 えの」断がる識るいでどな、
 甘間く判氣め意く書のなきて、
 『人付、「答・一とな」でし
 はてがくたが情を「い心解と
 氏し氣なま心感れ「ま良理解と
 郎と「は、良・こあい・は源
 健主」でり、性、が志して来
 居はくさあで理本性だ意し来
 土氣利働も合「る殊ま・とて
 で「がの」場、あ特て識の出
 ろ、氣面合なとでの、意もらる
 こて「情場殊あ語念よ・たかあ
 つが、感る特た認概念に情しこ
 とい、感る特た認概念に情しこ
 つが、感る特た認概念に情しこ

はけがもとなと志が
 とつとてたと志が
 」びこみ。ん意方
 氣結するらなもた
 「にかかいた」え
 で力生法する氣考
 中造に用しす「て
 の創由の係吸のけ
)い自葉関呼まつ
 社きで言と深とび
 拓大中う然てう結
 創にのい自「い
 論ら常とるぶと力
 化もに氣てを氣創
 文りの「し目のや
 のよ造はかにそ力
 氣志創」生さ「像る
 は、意を氣をと。想れ
 氏ありも。たなく、ら
 雄あうる私かてして
 行でいあ、ついおし
 塚泉とがのちつ、明
 赤源」論も落ちり説
 の、氣義なが落ちり説
 意「ときちがる氏
 ら、の氣義なが落ちり説
 性、い大持」け塚
 知なでもえく結い

よ、漂たあか
 るは、して動
 い移のうのて
 てうもそた
 しいるはげよ
 示とぼ人あに
 が「の本め、
 字「立ち日染氣
 文「立」て「
 の。はる、もる
 来た」あよ心あ
 本い氣でにの
 うて「の土間観
 いし、た風人間
 と味り、れなも人
 」意、おさ的、地
 氣をて象本も地
 は「氣し表日天宙
 字るらうそはの
 文出あよつと人
 うにをのいこ本
 いさまのにな日
 ととさもらかう
 」くのぐざしい
 「を吹雲ら、た
 に米氣、ジだ
 後に、湯の、た
 うそのもメ、れ

参 考 文 献

- 一. 赤塚行雄 『氣の文化論』 創拓社 平成二年
- 二. 土居健郎 『甘えの構造』 一〇八～一一六頁 弘文堂 平成三年
- 三. 森本哲郎 『日本語 表と裏』 九三～一〇〇頁 新潮社 平成二年
- 四. 木村・敏 『人と人との間』 一六六～一七九頁 弘文堂 平成元年